

浄土

六月号



法然上人鑽仰会

昭和十年五月二十日 第三種郵便物認可（毎月一回一日発行）
昭和二十四年四月二十八日 運輸省（特別扱承認雑誌第三五二号）
昭和四十五年五月二十五日印刷 昭和四十五年六月一日発行

第三十六卷

第六号



目 次

表紙「伐折羅大将」松濤達文画

人生をひらく 一業にめざめる一	桐 山 有 節	… (2)
ヨーロッパかけあるき	細 田 隆 善	… (6)
世界の国からこんにちは 一万国博訪問記		… (11)
聖典説解⑥「小消息」の御法語に学ぶ	小 沢 勇 貫	… (16)
フランスの庭と花と		… (20)
最も仏道の修し易い涅槃を授記せらるるところ一それは浄土一		
	牧 野 教 端	… (22)
新刊紹介 大橋俊雄著「法然」一その行動と思想		… (26)
往相還相		… (28)
道② 嵯峨釈迦堂への道	高 橋 良 和	… (29)
宝物シリーズ⑥ 木喰五行上人と千体仏		… (32)



今月のことば

＝祈る心＝

このところ人間の生命をかけたハブニングな出来事が二つも続いた。一つは日本中をテレビに釘づけにしたよど号乗っ取り事件であり、一つは世界の視聴を集めたアポロ十三号の事件である。どちらも人間の生命が危険の極限にさらされ、そして最後には無事にその尊い生命が保護されたということでは、同類の事件であった。しかし、前者はイデオロギーの谷間で起った人間の悪業のしわざであり、後者は人間の知恵が宇宙に闘いをいどんで敗北したしわざであった。

いずれも人間のしわざから起ったハブニングには違いなかったのであるが、私はこうした人間の生命の尊び方において、極めて異質なものを見て、日本人の一人として大いに考えさせられるところがあった。

アポロ十三号が故障した以上、何とか三名の命を守らねばならぬことになった時、科学の全力がこれに傾注せられたことはいうまでもないが、如何に発達した科学力でも限界がある。その時には三人の生命は宇宙の中で消滅する以外にない。こうした時に誰が祈らずにいられようか。ニクソン大統領は、全米に無事帰還を祈るように訴えろと共に、自からも又祈った。そして、全世界の祈りも報いられて、三人は無事着水した。航空母艦上に着いた三人に課せられた最初の行事は何であったであろうか。それは牧師による感謝の祈りであった。

十二号アポロが成功した時も、ニクソン大統領は先ず神に感謝した。これと比較して、よど号の時、誰が祈り、そして感謝したであろうか、首相の言葉の中にその片鱗もなかった。一体これはどうした事であろうか。アメリカ人が特に宗教心が厚いとは思わない。しかし、こうした事が生活と一つとなっていて、生活と一枚になった宗教があることを痛感する。生活と離れた仏教を持つ日本人は、大いに反省せねばなるまい。

(安居)



人生をひらく

—業にめざめる—

桐山 有節

(横浜市在住・中学校教諭)

Aさんは、わたしの親しいよき先輩であるが、最近身体の調子が悪いとこぼしていたのが、とうとう胃癌の宣告を受けた。もともと本人はこれを胃癌とは知らず、胃潰瘍の初期ぐらいに軽く考えていたとのことである。というのは、もし癌であるという事実を本人に聞かせたら、そのおそろしさを知っているだけに、落胆もひどく死期を早めるであろうとの家族や親戚の計らいによって、主治医からも、本人だけには胃潰瘍の診断を申し渡してあるのだと、看護の奥さんから、そっと聞かされたのである。

この主治医は、実は、わたしの友人であった。ある

日、青い顔をして弱っているAさんを見舞ったこの足で、友人の主治医に会い、どうか全力を尽して治療してくれるようにと、懇々と頼みこんだのである。

ところが、主治医のいうには、ほんとうのところ、Aさんの胃癌は、すでに痛い膏盲に入るといったところまで進んでいるので、もう生命断念は、日時の問題であるというのである。胃癌患者は、あまり苦しまないたちの者と、時には非常に苦痛を訴える者ときく。Aさんは後者に属するので、本人や家人の求めに応じて、この苦痛をやわらげるため薬液を注射することになっているという。

「それは良い薬があつたものだね」

「ところが、その薬品は実は止痛にはよくきくが、一方身体の方には副作用があつていけないのだ。悪いと知りつつ注射を打たねばならぬ医者商売も、随分辛いものだよ。」

「じゃ注射を打てばやはり寿命を縮めるのか」

「そうだとも、打たねば苦しむ、打てば命を縮める。併し打たなくとも遂には死ぬという病状なのだ。」

君は仏教者だけれども、どのように説明するのかね。医者としては、ただ辛いだけで、さっぱりわからないのだ。」

こういつて思案に沈んでいる医者に対して、わたしも、一寸返答に困った。しかし、このとき、ふと浮んだのが「業」ということである。

わたしたちは、早晩死ぬべき命を抱えてこの世に生れてきた。辛い病にとりつかれる。手を尽しても死ぬものは死ぬ。しかし、手を尽さなくては苦しい。これが人間の業ではないだろうか。たちの悪い病気を業病というのが、生きているものにとって、一切の病患は、患者みず

からの招いた業病なのではないだろうか。

こう考えてくると、病を通して、しみじみとした業の感受がおこってくる。これを治療しようとして辛い思いをする医者も業なら、一日たりとも身代りしたくとも、代ることの許されぬ見守る看護の家人も、また業であらう。そんな意味のことをポツリと主治医である友人につぶやいてみた。友人は、うなずいて聞いていたが、

「なるほど仏教でいう業とは古い思想だとぼんやり考えていたが、静かに話を聞いてるうちに、いま僕の生命のなかに不朽の真理としていきいきと蘇ってきた。」

業は科学であつて、しかも科学以上のような気がする」

と合槌を打つのであつた。

おもえば、わたしたち、業縁のなかに生きているのである。せめてお念仏して、この深い業のきづなに縛られているわが身を懺悔させていただき、如来さまのまえにひざまずいて、どうすることもできないわが身が、お念仏のなかに救われ、道が開かれていくのだと感じとらずにはおられないのである。

釈尊は、その成道直前に、無明よりはじまって生、老死におわる十二因縁の觀を順觀逆觀されたと伝えられているが、わたしは、いま現実の生老病死の四苦を、業の体験のうちに、深く感受し、悲痛きわまりなき人間苦の人から、なにかほのぼのとしたものを感じとってゆくのである。

○

「一難去ってまた一難」という言葉があるが、車輪のまわるように苦難は繰り返されていく。いったいどこからこの苦がやってくるのだろうか。世のなかには、人間の運命だとあっさり片づけてしまい、投げやりにすごす人もある。神さまの思召しだといって無理やりにこじつける独断者もあろう。また、すべてのことは偶然に廻り合わせた人間のあやだとして一切のできごとに傾着なく、したい放題をして通ればよいのだとおもう人もある。

しかし、わたしには、不合理と、独断と、自墮落な考え方では、どうしても落ちつけないものが、心の底にこびりついていて仕方がない。

殊に、このごろでは、一切の人間苦は、社会の罪、環

境のしからしむるところであるとして、客觀的な周囲の事情を是正し、社会的機構を改革することにのみ重点を置こうとする傾向が、非常に強くなってきた。このことは一応もつともなことである。むかしより「氏より育ち」ということも、この辺の事情に当てはまると考えられる。

しかしながら、一面、靈性の革命が忘れ去られ、精神的な内部反省を欠くならば、真に地についた社会改革は成就するものではないことを、はっきりと認識する叡知を忘れてはならない。

この自覚こそ、いまいうところの「業」への目醒めではないだろうか。業の自覚なくしては、一切の行為は歯車の空転である。「外から内へ」ではなくて、「内から外へ」、これが業の自覚に立つものの行き方である。

釈尊は、惑業苦の三道流転の相を説かれたが、わが心の惑いより、身口意三業にはたらきを起し、これによって限りなく苦をうけるとされた。「除苦惱法」が仏教の目指すところだとすれば、物心一如こそ仏教の根本的な立場だとすれば、わたしたちの批判の眼は、つねに物心両面に平等に注がれ、しかもこの方向は、「内より外へ」

が正常のものとして、まず考えられねばならぬことを指示されたものといつてよいであらう。

わたしたちは、いつも外部からの批判に対しては、血眼になって弁解しがちであるが、内にふりかえって自らを批判する勇氣に欠けているようである。少くとも他人が自分に向つてなにか鋭い批判を下したとき、なるほど自分に対して、そこまで深く関心をもつてみてくれるのかと、他人の批判に感じ入るゆとりぐらいは、あつてほしいものである。

その根底となつてゐるものが、業の目醒めというものである。

かように考えをめぐらしてみると、業の感じというものは、常に一種の牧歌的な哀調をそれみずからの内に帯び、その色彩にはいかにも暗い感じを湛えているようである。少くとも業の思想には、人生の悲しい涙がにじみこんでゐるように思われる。

けれども、これは業に対する一面の見方であつて、決して業たるものの全貌を、根本的に指摘したものではない。業に人間の自由意志が認められぬと考えるのは、世の運命論と混同させる人びとの愚味さからきた誤謬であ

る。

過去から現在への連続の上には、嚴肅な業道因果の不可避的な必然性があるとともに、現在から未来への進展の上には、明朗にして自由な業道の選択性がある。

「時」は自然の流れであるとするれば、過去もその時には現在であり、また未来でもあつた。わたしたちは、常に過去を反省するとともに、現在より未来への、美しい夢を忘れてはならない。過去は、現在を縛る裁きをもつてゐるが、現在は未来を生む、光りを担っている筈である。

ここに明るい業の展開が認められねばならない。

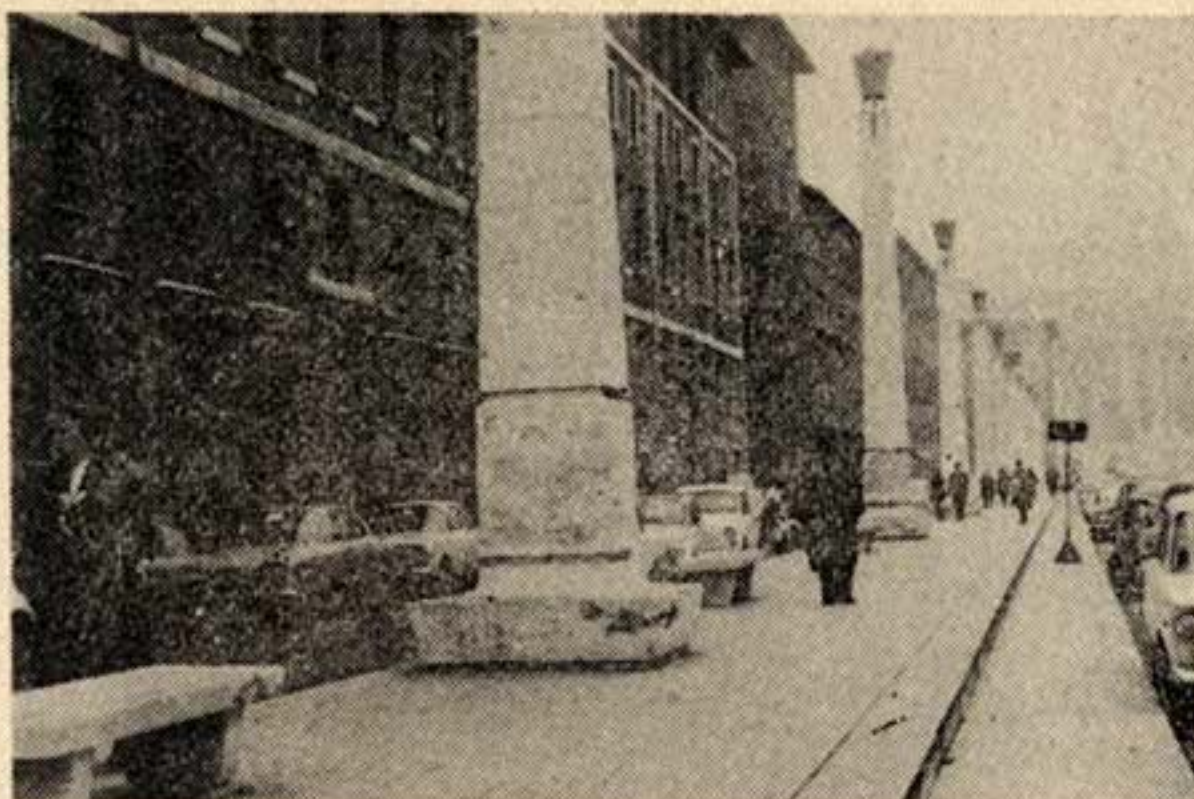
業の感じを、ただ思想や教理にのみ停滞させず、この思索を自己体験の實踐にまで進めることによって、そこに人間の明るい生活と輝しい将来を約束することに氣づかなくてはならない。

業に泣く人こそ、如来の慈悲に悦び上る人であり、わが身の罪業の徹底的自覺なくしてどうして如来の深厚な慈心に浴することができようか。

わが身の業の強い目醒めとその体験こそ、信仰に入る門戸ともいうことができる。

ヨーロッパかけあるき

細田隆善
(東京・江東区勢至院住職)



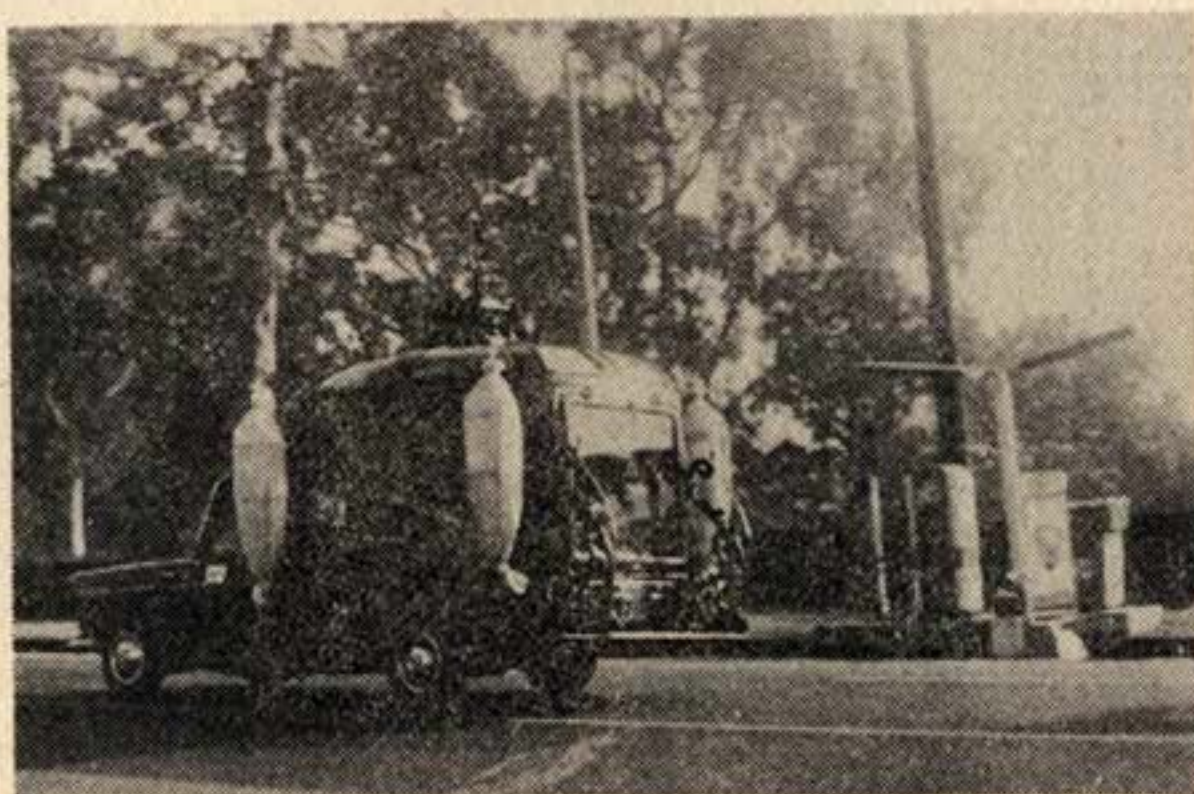
ローマ

=バチカン, サン・ピエトロ通り=



パリ

=墓地=



ローマ

=靈柩車= (カソリック教徒は土葬)

欧州の旅の魅力

イギリス・フランス・イタリア・スイス・ドイツの五カ国を、かけあしで一月ちかくまわってきました。欧州の旅のたのしさはいろいろあります。

欧州は歴史はふるく、史跡のおおいこと。二千年前の古代ローマの史跡をはじめ、ギリシャ時代——ローマ時代——キリスト教時代——ルネッサンス——近代へと歴史と文化の足跡は、たくさん史跡をとどめています。

欧州は音楽・演劇・映画の国。パリのスカラ座、ミラノのオペラ座、ベートベンなどの有名な音楽家の輩出、シェークスピアをだした演劇の国イギリス、フランス映画、イタリア映画は戦前から有名。

欧州は美術の国。パリは世界美術のトップ。ルーブル美術館は質量とも世界第一、フロレンスはルネッサンス文化の町、ボンペイには二千年前の古代ローマの美術の遺産をとどめています。

欧州はキリスト教文化の国。かずおおくの有名寺院が宗教芸術の殿堂ともなっています。ロンドンのウェストミンスター寺院、パリのノートルダム寺院、ローマ、バチカンのサン

ピエトロ寺院、フロレンスとミラノのドウモ寺院、ミュンヘンのフランウエン教会など。

欧州は風光明媚の国。スイスの山岳と湖水、パリの町並、南仏のコートダジュール海岸、モナコ、イタリアのナポリ、ソレント・ベニス、ドイツのライン河、国々によってそれぞれの風光の美をきそっています。

欧州の料理と酒はおいしい。各国は独特の料理をほこり、イギリスのウイスキー、ドイツのビール、フランスのブドウ酒はやすくておいしい。

ショッピングのたのしさ。日本よりやすい品はたくさんあります。ロンドンの服地やライター、パリの香水、イタリアの革製品、スイスの時計、ドイツの万年筆等々。

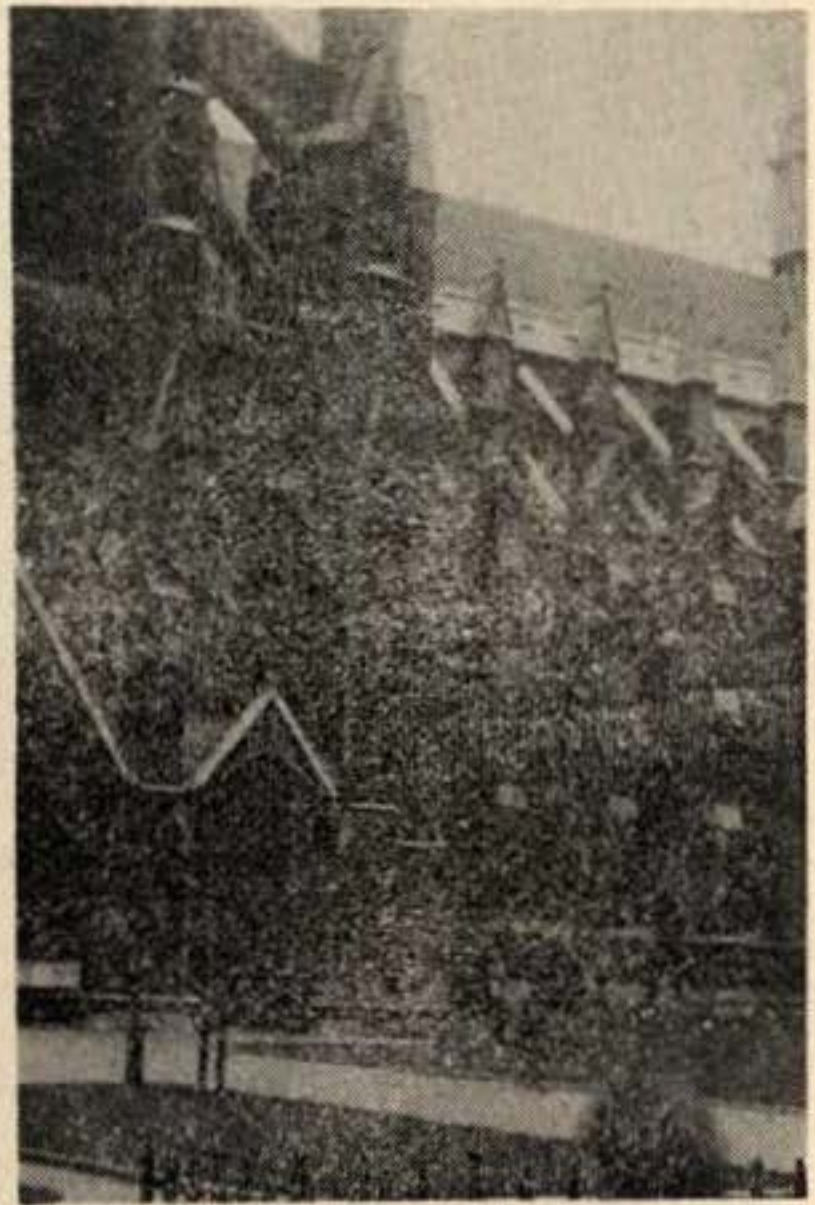
欧州はどこへいっても交通網が整備されています。鉄道はふるい博物館ゆきの汽車もあれば、欧州各国をつつばしるすばらしい特急もあります。ドイツのアウトバーン、イタリアの太陽の道路をはじめ、各国の整備された高速道路は自動車の旅をたのしめます。スイスの登山電車はアルプスの頂上まで観光客をはこびます。飛行機は欧州の各都市をむすび便利です。

欧州の旅のめんどろなことは

日本をでるとき持出金の制限、飛行機の荷物制限があります。国境通過にはパスポートと検査、入国カードと出国カードの提出。パスポートはおとしたら大変、いつも身につけていなければなりません。

各国まちまちなお金。お金の計算をおぼえたところにはつぎの国へいってしまいます。

食事はお米と味噌汁に縁がなくなります。三日たつとソバがたべたくなり、五日たつとスシがたべたくなります。ロー



ロンドン
＝ウエストミンスター寺院＝1065年建造

マでたべたタクアンは三きれで五百円。

言葉の不自由。欧州各国は自国語にほこりをもっていて、英語をあまりつかわない。港やホテルでは英語で十分。

お風呂の不自由。バス・トイレ・手洗いがいっしょになっていて、バス式の風呂はなれるまで不自由なものです。

なんでもチップ。ボーイに荷物をはこんでもらうとチップ、トイレもチップの皿がおいてあるところがあり、タクシーもチップ、夜間は夜間割増しチップ、いつもポケットにバラ銭をもっていないと不自由。

洗たくにこまります。クリーニングをたのむと二日も三日



スイス

＝チューリッヒの教会＝

もかかることがありますので、自分で洗たく。バス風呂のなかで洗たくするのが一番、冬でも暖房がきいていのですぐかわきます。

マナーのわずらわしさ。ホテルの廊下はスリッパや寝巻きは厳禁。なんでもレディ・ファースト、女性を優先、女性のまえでバンド・ズボンに手をかけてはいけません。また靴ヒモに手をかけること厳禁。食事は部屋へはこんでくれません。ほかのお客といっしょ。食事中は禁煙、スプーンなどの音をたてないようにしなければなりません。ロンドンのホテルで日本の農協のおじさんたちが、スーブをチニューチューと



＝モナコの教会＝

味噌汁をのむように音をたてていましたのを、外人の観光客がめずらしそうにみていました。

落してはならぬパスポート

外国へいって、一番大切なのは命、二番目にパスポート、三番目にお金であります。日本人のだれであるかを証明できるのは、パスポートだけ、これをなくすと再交付の手続だけで一週間もかかります。またお金をつかいはたしたり、おとしたりするとこまります。内地のように電報為替でとりよせるわけにいきません。国外持出金額もきめられています。



＝ポンペイ遺跡とベスビオ火山＝

パリのホテルにとまった日本人のお客の一人が、タクシーをおりてから気がついたが、うちポケットにいれたはずの、パスポートとホテルのカギと旅先の現金、日本円にして二十万のはいった札入れがない。また道をひきかえし、路上をしらべたが、お金のはいった札入れはみあたりませんでした。警察へとどけ、大使館へどのように手続きをするか思案しながら、ホテルにかえりました。この由をホテルの受付につたえ、部屋にはいって、これからどうしようかとなやんでおりました。

そのときドアがノックされ、ボーイがはいってきて、さき



パリ

＝サクレクール寺院＝1919年完成

ほどお客さまへこれをわたすようにいって、かえった方がありますという。ボーイのさしだしたのは、落した札入れです。おどりあがってよろこびました。とどけた方にお礼をしようとおもって、ボーイにたずねますと、その方は名をいわずにかえられたとのこと。札入れのなかをしらべてみると、パスポートも現金もカギもはいつていました。そこに一枚の紙切れがはいっていて、これにとどけた方の住所氏名があるものとおもって、いそいでよんでみました。

ポールペンではしりがきがしてありました。「ふとしたことでこの品物を路上で発見しました。なかをみますとパスポートがはいっていて、日本の方であることがわかりました。大金がはいっているようです。ホテルのカギでホテルがわかりましたので、さっそくおとどけいたします。念のため現金をおしらべください。さようなら」と、しるしてあるだけで、住所も氏名もありませんでした。お礼のしようもなく、涙ぐみながら、その紙切れの文字をなんどもなんども感謝の気持ちで、よみかえしたといっておられました。

異国の空で親切にされるほど、ありがたさを感じるものはありません。あたたかい親切な心は、民族をこえ、国境をこえて人々の心のなかに、ひろまっています。

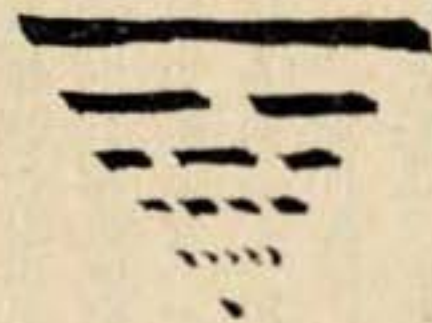


西の国から東の国へ

「こんにちはこんにちは西の国から、こんにちはこんにちは東の国へ」と、三月十五日から大阪千里丘陵を舞台に、日本万国博覧会は花々しく、その幕を切っておとしました。史上最高の参加国を得たこの博覧会は「人類の進歩と調和」をテーマに、おのおのの特色を最大限に盛りこんで、私たちの来場を待っております。これはそうした大がかりな舞台のほんの一コマをつづったものです。

この博覧会には全国の各種団体がいろいろな形で参加して

世界の 国から こんにちは



万国博覧会 訪問記

おります。茶道界では表千家・裏千家・武者小路千家・遠州・宗徧・簗内の六大流派が五日間づつ期間中、日本庭園内で抹茶の無料接待をいたすことになりました。私は四月四日から八日までその手伝いとして、見物旁々会場をおとづれたのです。

やすらぎをたたえた日本庭園へ

超近代的な造形やあざやかな色彩豊かなパビリオンの林立をよそに、静かなたたずまいを見せる日本庭園、そこが私たちの晴れの舞台となるのです。そこでまずその概要をみまし

よう。

東西約一三〇〇メートル・南北約二〇〇メートル・面積約二六ヘクタールの細長い地形のこの庭園は、日本政府の出席によるものです。西から東に傾斜しているこの庭園は、その地形を生かして西側を水源として東に流れる水流を配しております。この水の「流れ」は人類の進歩と時の流れを表わすことを意図しているとのことです。そしてこの流れに沿ってひろがる庭園は日本の造園史を見るが如くに、それぞれの時代の手法を取り入れ、その中に現代的な感覚を盛りこんで一つの作品としてまとめたとのことです。以下は私のへたな説



=ゆるやかな流れとなつて

竹林をゆく流れ=

明よりはと思い、庭園説明書の一部を拝借します。

大まか地割りは、四つに分けられます。最も上流となる西端部に迎賓館があり、周辺一帯はモミ・イヌマキなどの常緑針葉樹を密植して、上代をしのばせています。また、この東側に泉がわき、水は南北の谷を流れます。滝の水と合流してもみじ谷となり、南は竹の間を静かに流れる小川となります。

この二つの谷にはさまれた小山は、黒松の疎林で一面つつじでおおわれています。この山頂には休憩所、中腹には二つの茶室が建っており、これらの建物の周辺は茶庭様式を採り入れた中世風の庭となっています。

南北の両谷は、合流して州浜となり、その景観は日本独特の石庭の起源を思わせます。流れは、更に中央の池に注ぎます。池に面した中央休憩所からのちょう望は、芝山を背景として雄大に展開し、日本式庭園の集成期である江戸初期に範をとった近世風の庭となっています。

東側は、未来を象徴する明るく立体的なデザインのこい池・はす池・しょぶ田と、純日本的な段々畑をかたどった花壇が連なつて、開放的な現代の庭園となっています。以上が総工費二十億円をかけ、十年かかるところを二年間

で仕上げた日本庭園の概要です。

汎く万里に通じる茶道

茶は仏教発祥の地インド、その教えがひろく伝播したビルマ地方に流行し、仏教の東漸と共に同じように中国・朝鮮、そしてわが国に伝わってきたものです。そして当初は薬用としてのみ飲用されたことは栄西禪師の「喫茶養生記」などで明らかですが、そのうち、茶は心におちつきを得られる飲物として、僧侶の間では欲念と睡魔をとりのぞくための修行の方便として、親しまれてきました。やがて僧侶の布教と共に一般にも喫茶の風習が伝わり、室町中期の東山時代に、日本独特の芸道として大成をみたのです。したがって茶道はただ単にお茶を飲むという、日常生活から遊離したものではなく、人々の常日頃の行動、日常の茶飯を、より美しい生活に向上させる芸術として親しまれてまいりました。

この日本独特の芸術「茶道」を、この博覧会を通して、より多くの内外の人々にご理解いただくためにと、先の説明にありました二つの茶室の建築がなされたのです。

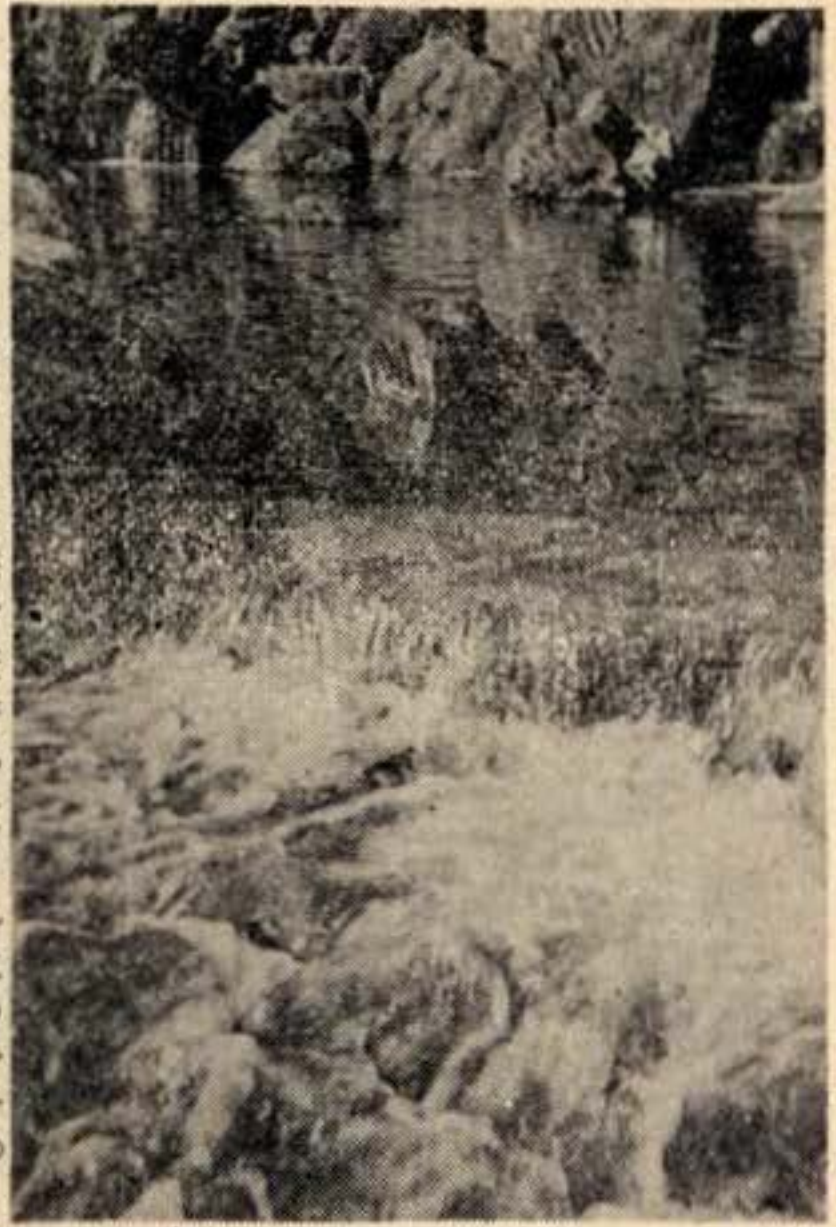
この二つの茶室は、京都商工会議所・京都経済同友会・京

都経営者協会の、京都の三つの経済団体が建築資金を受けもち、造園を京都大学工学部の田治六郎博士、設計を仙アートスタジオ、施工を中村外二氏という京都在住の方々の担当によって造られました。

こうしてできあがった二つの茶室は、万国博協会に寄贈され、うち大広間は佐藤首相により、人々をより大きくつつむということにより「汎庵」、小間は表千家千宗左・裏千家千宗室両宗匠により、千里のみならず万里に通じると「万里庵」と命名されました。坪平均単価一二〇万円前後をかけて造られた二つの茶室は、日本建築の伝統の中に、若人にも理解してもらえよう現代感覚をも取り入れた、創作された茶室となつて、日本庭園の一角にその美しいたたずまいを見せたのです。

芸者ガールのお茶会へ

前口上が長くなりましたが、ついでにこのたびのお茶会の性格について一言つけ加えましょう。前述しました六大流派の家元がそれぞれの担当期間中、必要経費を負担し、その出筈者は各流派の責任においてまかなうことになっておりま



＝水源附近の流れ＝

す。そして一日七百人に無料接待がなされたのです。このうち茶室の向い側の西口休憩所の立札席で、一般来場者のうち先着五百名、「汎庵」では一日二百人、万国博協会の賓客、およびフリーの外国人を対象としました。「万里庵」は拝観のみで、私たちの担当の際には濃茶席として道具のみを仕組みました。

こうして、通常のお茶会とは異なり、やってみなければ見当がつかない、不安と期待が交叉するなかではじめられました。私は最初の三日間、西口休憩所の担当でしたが、朝八時すぎ開場を待つ一般入場者のうらやましげなまなざしを横目

にみながら、日中の混雑が想像できない程、静まりかえった各バビリオンの間を通り日本庭園へ。十時の開園までに準備し終えねばならない。湯をわかし、茶碗をあたたため、お菓子をとのえ、道具を仕組む、することはたくさんありますが、これらは日頃よりやりなれていること、てきばきと進む。開園十五分前、着物に着換え、あとは来場者を待つのみ。一種のショー的要素を含んだお茶会故、お手前、お運びは振袖の似合うとということで、私など男子は来場者の整理にまわされる。

いよいよ開園、しかし朝のうちはバビリオンに急ぐ人々が多く、日本庭園を訪れる人はまばら。時折、二三人連れ出っでは来るが、手もちぶさたの感はいなめない。だがお昼近くになると事情は一変する。展示館からしめだされたと思われる人、早くもくたびれた顔の人などが押しよせて来たのです。そんな人々のなかの代表的な表情にふれましょう。

ちゃっかり型——旅行業者に連れられた団体さん。お茶を飲むことも一日の行程に含まれているらしく、いやいや入る人もいる。

感謝感激型——各展示館で待ちに待たされたあげくの一服とよろこび感謝し、ふらつと来たところで思いかけない一服

をいただけたと感激するタイプ。

無責任型——ただなら飲んでやろうというタイプ。ひやかし半分に入り、途中で出てしまふ若人、室内に入っても帽子もとらず、仲間とガヤガヤさわいでいる農協団体などがほとんど。宗教団体主催の団体客とは好対象です。

こうした日本人客に交って、一日平均百人ほどの外国人が訪れる。もの珍らしげに見守る人がほとんどですが、中にはあ然とさせられることばをはく外国人もありました。「芸者ガールですか、あの女の人たちは？」という、突拍子もない質問です。よく聞きますと、外国で販売されている万博用の日本紹介のパンフレットに記されている由、案内書を書いた人の無責任さに、いささか腹出たしくなったのは当然のことです。

人形鎮座まします「万里庵」

後半の二日間「万里庵」の担当。朝十時より夕方五時まで、昼食時間を除いて庵内に座り続けねばなりません。拝観者からの建物や仕組んだ茶道具への質問の応答が主な仕事。はじめのうちは一千万円以上も費した、真新しい畳のにおい

も心好い庵内に、唯一人優越感を覚えながら、質問にてきばき答えておりました。

しかし、足のいたさも手伝い出した午後、思わぬ会話を耳にしました。「あのお人形さんよくできてゐるわね」「おい！あれ人間か、それとも人形か、どっちだね」。庵内に一人座っている私が、光線のいたずらか、外から見ると人形が座っているように見えるらしいのです。障子のかげから、ソツとのぞいた老人など、「アッ人間ですか、これは失礼！」と、拝観もせず、逃げ出すように立ち去るのです。これにはいささかまいりました。

こうしてユーモラスななかにも、ハプニングに富んだ五日間。時には無神経な人のためにめいだったこともありましたが、まったく見知らずの人より、思わぬお礼のことばをいただき、はるばる来た甲斐があったと、一人ほくそえむこともしばしば。お茶を通した人と人との心のふれあい、心身共につかれましたが、二度とは体験できない数々の思い出を残して、ようやくその輝かしい明りをともし、一転して幻想の世界に変わったかのような会場をあとにしたのです。

（本会主事 長谷川記）



「小消息」の御法語に学ぶ 〆六〷

小 沢 勇 貫

（大正大学教授）

八、結び

この御法語は終りに、悦ぶべし弥陀の本願にあう事、報ずべし仏の恩徳、頼むべし乃至十念の詞、信ずべし必得往生の文と、以上四句で結ばれている。椎尾法主はこれを四応として、初めの四不可疑と首尾照応するものと説明されている。非凡なご見解である。

天に仰ぎ地に（臥）して悦（ぶ）べし、このたび弥陀の本願にあふ事を。行生坐臥にも報ずべし、かの仏の恩徳

を。

今生に阿弥陀さまの本願に遇うことができ、大悲にはぐくまれている身をおもえば、まことに限りない法悦を感ずること、天に仰ぎ地に俯してもよろこぶべきことではなければならない。このような法悦は決定の信心をもつものにのみ味われることである。『無量寿経』には、いま本願のおしえを聴くことができるのは、前世に諸仏を見たてまつったすぐれた宿善によるものと説かれていゝる。先には五難を超克したよろこびを述べられた中に、本願に遇うよろこびを挙げ、なおこの御法語には繰りか

えして本願について叙べておられる。まことに本願こそは浄土宗のおしえの生命であるからである。

次には行住坐臥の四威儀、日常いかなる時も、阿弥陀さまの広大な御恩徳にむくいることを忘れてはならない。善導大師はお念仏を相続することが釈尊への報恩であるとし（般舟讃）、また自らこのおしえを信じ、多くの人びとをも信仰に導き、大悲をあまねく伝えることが、仏恩に報いる道であると教えておられる往生礼讃。報恩のおもいは信仰をもつものには常に感ぜられることであり、念仏者が報恩のおもいをもつことは自然のことである。後には真宗や西山義の一派などに、称名を仏恩報謝の行とする説も生じたのである。

報恩とは今日のことばでは多く感謝といわれる。報恩感謝の気持は宗教信仰をもつものでなければ感じにくいことではなからうか。人はたれでも自分一人だけで生きられるのではなく、数かぎりない因縁によって生かされているのである。天地一切の力がかかわっているといっ

てもよい、仏教で説く縁起の理は、倫理的には恩恵ということに外ならない。このゆえに知恩報恩ということ、また菩薩道として重視するわけである。今日の混迷した世相の中に、報恩の説は社会倫理としても見直さなければならぬと思う。

頼（み）ても頼（む）べきは乃至十念の詞、信じても猶信すべきは必得往生の文也。

この二句は、古来安心の最後のおちつき処を明示して結ばれたものとされる。「頼みても頼むべき」、「信じても信ずべき」と言葉を重ねられて、ねんごろにいていねいに人びとにすすめておられる。「乃至十念の詞」とは、阿弥陀さまの広大な四十八願の中の根本とされる第十八願を指すのである。その願に

もしわれ仏を得たらんに、十方の衆生至心に信樂しんじょうしてわが国に生ぜんと欲して、乃至十念せんに、もし生ぜずば正覺を取らじ

とあり、これを取意すれば

もし私が仏のさとりを得た後、すべての人びとがまことの心をおこし、深く信じて往生をねがい、十念念仏するものまで、もし往生できないようなことがあれ

ば、その間断じて仏にならぬ

と堅くみずから誓っておられる。このお誓いを上人は特に念仏往生の願と名づけ、信をこめた念仏の行を、この願の主体とされたのである。仏のみ名を称えて、救いのお力の絶対を味われたのである。

「信じても猶信すべきは必得往生の文」とするのは、第七項で取意してあげた善導大師の『往生礼讃』の文を指し、その最後の一句に全文をおさめているのである。

『選択集』の第三章にも、初めに『無量寿経』の念仏往生の願文と礼讃のこの文が並び引かれ、その下に本願についてくわしく論述されている。上人は「この文は四十八願の眼なり、肝なり、^{たましい}神なり」と、四十八願全体に生命を与えた尊い文字と見られた。願文「若不生者不取生覺」(若し往生しないものがあるならば断じて仏にならぬ)のお誓いが成就して、判然と現益をあらわす。本願がことごとく成就して救済のお力が現にはたらくことを、上人はその深い宗教経験とともに確認されたのである。この文に接してしばしば感涙されたというのも、これがためである。

乃至十念必得往生と思ひ定めるのが安心の至極であ

る。この御法語の始終、またどのお詞もこの義を含まぬものはない。わたくしどもの救われる道は、ただ念仏往生の一路であり、これについて決定の信をねんごろに示しになったのである。

仁戸田先生が先頃の講演で、法然上人の宗教の純粹性について讃仰されたが、現代の社会でも宗教の混迷ははなはだしく、純粹性に立ちかえる必要性も痛感され、責任も感ずることである。

附 えらばれた念仏

法然上人の浄土開宗は、その当時の仏教界にとっては大きな出来事であった。上人の晩年には、南都北嶺の旧仏教の陣営から、しばしば非難攻撃を加えられ、滅後にまで権力をかりての弾圧もあつた。教義上の論難に及んでいるものもあるが、上人の根本の立場は全く理解にかかっていない。念仏に関する説を見ても、例えば元久二

年興福寺から出された弾劾の奏状や、貞応三年叡山から訴えた上奏文も、いずれも筆をそろえて、念仏は諸宗の通規、共通の修行であってこれによって一宗を別立する必要がないとし、念仏には浅深重重ある中称名は浅く劣った行であるとし、念仏をあやまる失としてさまざま指斥している。見解の相異もあり、上人と相容れないものであった。

念仏は印度以来仏教の修道として重視され、すべての修行は仏を念ずることの外にないといってもよい。念にも種々の意味がある。憶念といって、仏の相好などをおもうもあり、観念といって、心をしずめて仏や浄土を觀じ真理を觀照するもあり、また称念といえば単に仏の名を称えるのである。仏についても諸宗に説くところ甚だ深く多様である。一般論では称念よりも観念が尊ばれ、観念の中でも真理を觀ずることが重んぜられた。また念仏が諸宗の通行となっていたことも事実である。

浄土宗の第二祖聖光上人が初めて吉水の草庵を訪れた

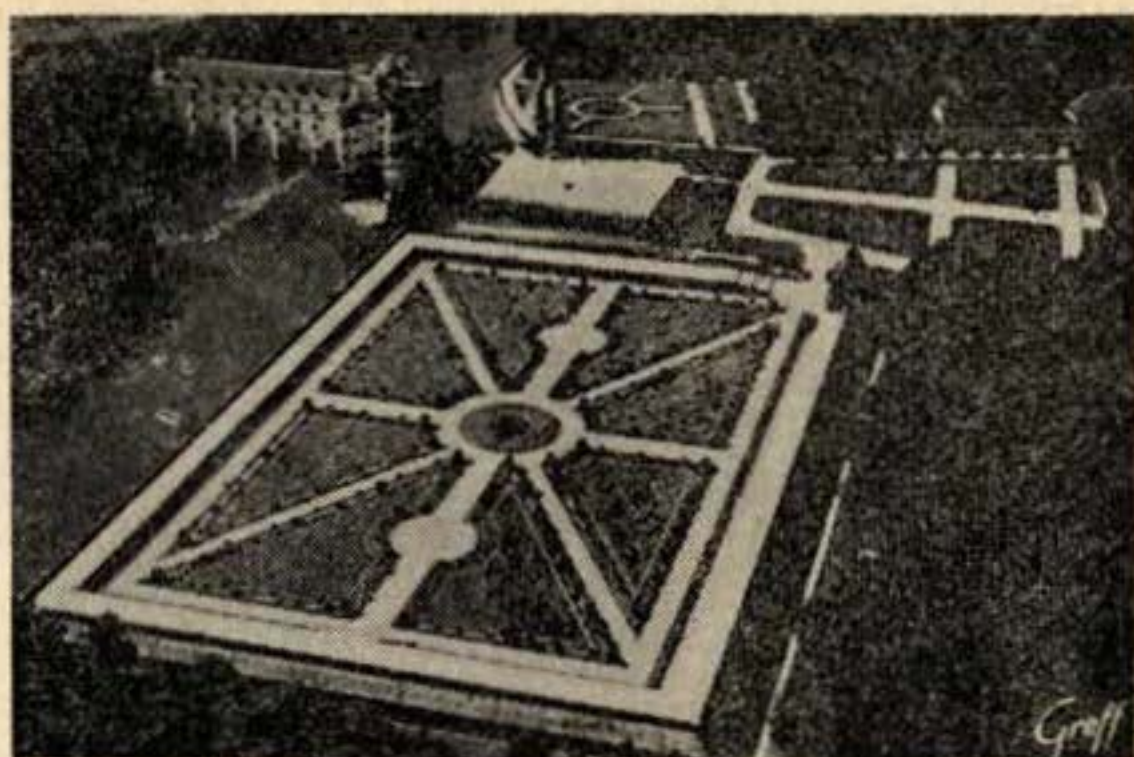
時、宗祖は三重の念仏（摩訶止觀の念仏・往生要集の念仏・善導勸化の念仏）を説かれたと伝える。上人が称名を弥陀本願の行とし、専修を主張されたことは、偏えに大師の説によるものであった。しかも上人はさらに進んで、称名の一行を本願に誓われた仏のみ旨をつきとめ、ふかく体認するところがあつた。布施とか持戒とか、菩提心とか仏像を造り堂塔を立てるなどの諸行を本願とされず、ただ称名の一行をえらばれたのは何ゆえであろうか。これについて『選択集』第三章に、念仏と諸行とを比較して勝劣・難易の二つの意義をもって、明快に議論されている。如来は平等の大悲心から、普く一切の衆生を救済するために、称名の一行をえらばれたことを確信された、仏の選択という空前の主張となっている。

本願にえらばれた称名の行こそ、最も勝れて絶対の功德をそなえたもの、智者も愚者も、善人も悪人も、富めるも貧しきも、何人にも修し易い称名の行一つが選ばれたことに、深く平等の大悲心を味われたのである。まことに空前の主張であつて、また革新的でもあつた。このような教義論は、この御法語にはあらわれていない。

拙い解説になり了り祖徳をけがすをはなはだ恐れる。

フランスの

庭と花と



シュノンソー城とその庭園

むかしから日本人は自然を愛し、自然の美しさを尊ぶ国民であるとされている。だから庭をつくるにしても山紫水明の美を理想に、工夫を加えてなお趣きをこらしたものが多い。名園と呼ばれる立派な庭園から、マイホームのささやかな庭にいたるまで、やはり基の心は自然の美しさであろう。

ところで、フランス人は正反対である。彼らは庭をつくるにあたって、徹底的に自然を征服してしまう。綿密に計算された図式に則って、並べるものは一列に並べ、刈り込むものは等しく刈り込み、幾何学模様さながら一切を人工の手にゆだねて、人間のつくりだす美しさを、木や草花という自然の素材を使って繰りひろげて見せる。このような様式の庭園はヨーロッパの他の国々でも見受けられるが、はっきりフランス式庭園と呼ばれている。その代表的なものがヴェルサイユ宮殿の庭園であろう。広大な敷地に、目も覚めるような芝生の緑を基調にして、うち続く色と線の造形美。だがその美しさにもまして、これを成しとげた人間の意欲に、見るものは思わず息を呑み、圧倒されてしまうのだ。しかし、これはフランス人が自然の美しさを大事にしないというのではない。シュノンソーの城などは、川の流れに橋をかけたかたちで、その端正なたたずまいが背景をなす自然と巧みに溶けあい、互いに引き立てあっているかのようなのである。この城にも、二つの有名な庭園がいまも残っている。

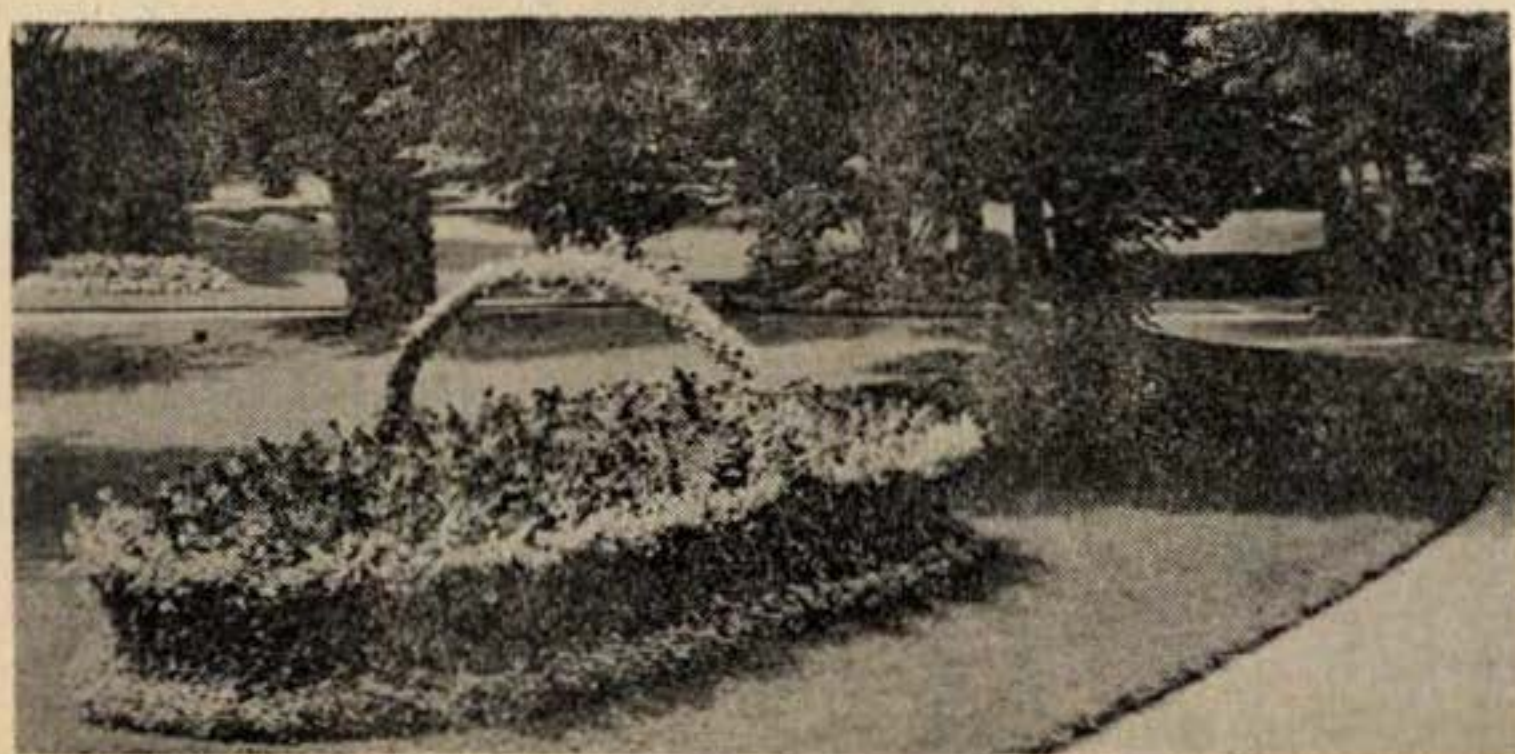
もちろん、このフランス式庭園にも小ささまああって、パリの公園をはじめ、どんな小都市の広場や町かどでも、美しくデザインされた花壇が道ゆく人びとの心を慰め、住む人びとの憩いの場所となる。そしてこれが実によく手入れされ、手入れをする人びともまた実に丹念で、町を美しく飾ることに誇りをもっているようだ。

さて、この見事なフランス式庭園も、馴れるとあまりに均一化されていて風情が足りないような気がしてきた。ところが、あるときボワチエの町で早道をしようと植物園を通りぬけたさい、白いいさ葉の灌木を使って花籠をつくり、なかに赤く燃えるようなサルビアを一杯に植えてあるのを見て、あまりの芸の細かさに、私は思わず立ちどまり、感嘆したものである。これほどまでに美を創りだすことに専念するとは――

考えてみると日本では、名だたる庭園はもとより、個人の庭にしても、塀や垣根で囲ってそのなかの美しさは知る由もない。花や木の美しさは個人個人で眺めるものになっている。だがフランスでは、多くの人に見せて、お互いに美しさを分ちあい、お互いの美しいとおもう心が触れあっているような気がする。よく個人の家の窓に花の鉢を並べてあるのが目につくが、その花の色を通して、なかに暮す人の心がその下を通るものの視線に自ずと伝わってくるのではなからうか。

私が独仏国境に近いアルザス地方をドライブしたとき、小さな村にさしかかると、ここはフランスで一番美しい村だと教えられたことがある。しかしそこはとくに風光明媚な土地ではない。平凡な農村にすぎなかった。だがこの村の家という家の窓、テラス、入り口、そして道端の塀の下にも、およそ花の飾れるところには花が飾られている。決して高価な花ではないけれど、ゼラニウムだのペチュニアのような花が、村全体に咲き乱れている。とりわけフランスのオリンピック委員長の家という、葛のはった長いレンガ塀には針金で植木鉢が随所に吊るされ、さながら花の幕のようであった。聞くところによると、この村では数年来村長の提唱によって「花いっぱい運動」が続けられているとか。高度の個人主義を標榜する国民でありながら、おたがいに心を合わせて、自分達の生活をより豊かにしているのは、まことに羨しいかぎりである。

(T・F)



ボワチエの植物園



最も仏道の修し易い涅槃を授記

せられるところ——それは浄土——

(東京新宿区西光庵中)

牧野 教 瑞

法然上人の御歌に、

阿弥陀仏と申はかりをつとめて

浄土の壮厳見るぞうれしき

と信仰の喜びを詠じたのがある。また、その反面、

柴の戸にあけくれかかる白雲を

いつむらさきの色にみなさん

と嘆いておられる御歌もある。

浄土とは……? 「無量寿経」に次のように説いている。

「講堂精舎宮殿樓觀あり、皆七宝の莊嚴自然の化成なり、

……黄金の池には底に白銀の沙あり、白銀の池には底に黄金の沙あり、水精の池には底に瑠璃の沙あり、瑠璃の池に底に水精の沙あり、珊瑚の池には底に琥珀の沙あり、琥珀の池には底に珊瑚の沙あり、磤磤の池には底に礪礪の沙あり、」

これは上巻の終りに出てくる。池がこのようなになれば、また岸上にある梅檀樹の葉も華も全て七宝で出来ている。そこで沐浴する菩薩・声聞も心垢蕩除されて、色身清浄であり、涅槃の道へと導かれる。浄土の万物は、自然法爾であり、その住人の意のままに出現する。すべてが無尽蔵に仏の願力を用意されている。浄土の世界は無相の相である。また、無量寿経の異訳「無量清浄平等覚経」には、花をたとえにして四十里・八十里・三百二十里・六百四十里の花へと、だんだん大きく表現し、それら悉く地に落る頃には縮小してやがて消滅する。さんさんと降りそそぐ花卉は、少しも地に積ることなく、当然その腐臭もないという。その許で、菩薩・阿羅漢・その他の住人は皆各々自分達のなすべき行道に励んでいる。即ちすべてが生き生きと躍動し喜びに満ちた相を描き出している。

浄土とは字の如く「清浄な世界・楽有の国土」であると、私は単純な気持ちで受け取り、それにたいして気にも留めていなかった。こうして往生せる者の営みをみていると、浄土とは「最も仏道の修し易い処。次に涅槃を授記せられている処。」と解した方がよさそうにも思える。このように生き生きと流動している浄土は、例えばコマが早く回れば廻るほど、それは静止しているかのように見える様なものだ。即ち冴え澄んだ寂靜なる世界には、他仏国の交流も激しく、絶えず仏道に励む住人で生き生きとしている。

国土莊嚴を説いているこの部分は非常に文学的であり、芸術的だと私は常々思っている。更にこの後で、浄土の住人は「威な同じく一類にして形異状なし」と説く。浄土の世界には醜惡の差別なく、すべて同一色であるという。しかし初期無量寿經「大阿彌陀經」「無量清浄平等覺經」には、「女人往生すれば即ち化して男子となる」と書かれている。女性である私にとって、この文はいただけない。まあ、このことは別に於て、兎に角浄土は平等の世界で徹底しており、共產主義を誇る友人に此処を話したら、彼は何と言うだろうか。ところが、その友人が反問しそうな問いが次に出てくる。即ち現実に差別があるのはどうしてなのかと。經には、

「貧窮乞人は底極廝下にして衣は形を蔽さず、食は趣かに命を支う、飢寒困苦して人理殆んど尽なんとす、皆前世に徳を植えず。財を積て施さず、富有にして益慳み、但唐らに得んと欲して貧求して厭くこと無く、善を修せず、惡を犯して山の如くに積めるによる。是の如くして壽終すれば財宝消散す、身を苦めて聚積して之が為に憂惱すれども己れに於て益なくして徒らに他の有と爲る、善として怙むべき無く、徳として恃むべき無し。是の故に死して惡趣に墮して此の長苦を受く、罪畢て出ること得れども生れて下賤となる」

と説いている。これはまさに人生論そのものだ。書店の店頭に出ている青春シリーズの人生論などを読むよりかはよほどよい。「大阿彌陀經」「無量清浄平等覺經」には、ここを更に細かく説いている。人生論はまだ続く。三毒段には

「世人薄俗にして共に不急の事を諍う、此の劇惡極苦の中に於て勤身營務して以て自ら給濟す、尊と無く、卑と無く、貧と無く、富と無く、少長男女共に錢財を憂うることな有無同じく然り、憂思適に等し、屏營として愁苦して念を重ね慮りを積む、心の為に走使せられて安き時あることなし、田あるものは田を憂え、宅あるものは宅を憂う、牛

馬六畜奴婢錢財衣食什物また共に之を憂う、思を重ね息を累て憂念愁怖す、横に非常の水火盜賊怨家債主の為に焚漂し劫奪せられて消散し磨滅す、憂毒怙々として解る時あることなし、憤りて心中に結んで憂悩を離れず、心堅く意固して適に縦捨することなし、或は摧碎に坐て身亡び命終すれば之を棄捐して去る。誰の随う者もなし、尊貴豪富も亦斯の患あり、憂懼万端にして勤苦すること此の如し、衆の寒熱を結んで痛と共に居す、貧窮下劣は困乏にして常に無し、田なければ亦憂て田あらんことを欲し、宅なければ亦憂えて宅あらんことを欲す、牛馬六畜奴婢錢財衣食什物なければ亦憂えて之あらんことを欲す、適に一あれば復に一を少き、是あれば是を少く、齋等あらんことを思う、ますます欲して具さに有れば便ち復た麤散す、是の如く憂苦して当に復た求索すべし、時に得ること能わず、思想して益なし、身心俱に勞して坐起安からず、憂念相い随て勤苦すること此の若し、亦、衆の寒熱を結んで痛と共に居す、或る時は之に坐りて身を終え命を夭す、冒て善を為し道を行じ徳に進まず、壽終り身死て当に独り遠く去るべし、趣向する所あるも善惡の道能く知る者なし」と。

これは三毒煩惱のうち「貪欲」の相を説くものであり、次

に第二の煩惱「瞋恙」の相を説く。

「或る時は心諍て悲怒する所あり、今世の恨の意微く相い憎嫉すれば後世に転た劇げきして大怨と成るに至る、所以は何ん、世間の事さらに相い患害す、即時に急に相い破すべからずと雖も然も毒を含み、怒を畜え、憤を精神に結んで自然に剋識して相い離ることを得ず、皆当に対生して更に相い報復すべし、」と。

第三の煩惱「愚癡」の相では、

「生死の常の道転相い嗣立す、或は父、子を哭し、或は子、父を哭す、兄弟夫婦更相哭泣す、顛倒上下無常の根本なり、皆当に過ぎ去るべし、常に保つべからず、教語開導すれども之を信ずる者は少し、是を以て生死の流転休止あることなし、此の如き人朦冥抵突して經法を信ぜず、心に遠慮なく各快意せんと欲す、愛欲に疑惑せられて道徳に達らず、瞋怒に迷没して財色を貪狼す、之に坐て道を得ず、惡趣の苦に更りて生死窮り已むこと無かるべし、哀なる哉、甚だ傷むべし、或る時は室家父子兄弟夫婦、一りは死し、一りは生じて更に相い哀慙し恩愛思慕して憂念結縛し、心意痛著して迭に相い顧恋し、日窮して歳を卒て解け已むこと有ることなし」と。

我々の苦悩は、これら三つの根本煩悩によって毒される。

この本能的欲望から現実の人間生活が展開されている。坂口安吾は人間を、「生きてゐる人間」というものは、自分で何をしでかすかわからない。自分とは何物だか、それもとんで知りやしない。人間はせつないものだ。しかしともかく生きようとする。何とか手探りででも何かましな物を探り縫いついて生きようという、せっぱつまれば全く何をやらすか、自分ながらたよりない。疑ぐりもする、信じようと思ひこもうとし、体当たり、遁走、まったく悪戦苦闘である。こんなにして、なぜ生きるんだ。文学とか哲学とか宗教とか、もろもろの思想というものがそこに生れて育ってきたのだ。それはすべて生きるためのものなのだ。」と言っている。現実の人間生活のやりきれなさを追求すれば、皆この本能的欲望に帰結する。私は日常これらの煩悩を自覺していない。自分を悪人だとも善人だとも思っていない。しかし、そんな平凡な人間何か事があって切羽詰められると、人を裏切り胸算用で独走する。まるで己の手におえない生き物の如くに走り出す。他人の不幸をみても、私は共に涙を流しながらも心の底のどこかでほくそえんでいる。自己の意志とは無関係に走り出すそれは、本来誰しもが持っているものであり、人間の赤裸々

な姿であろう。また私はそのような己の力ではどうしようもない業の様なものを自覺している人に会うと、言い知れぬ郷愁を覚える。

この三毒・五悪段はシナ選述であるのか、インド選述であるのか、私は知らない。しかし私にとって、この三毒・五悪段はなくてはならない。この段があるからこそ浄土が浮き彫りにされ、しかも三毒・五悪段の裏付けとなる。

そしてまた、これらの人生の苦悩は永久に自己自身が背負うものである。現在自己の苦悩に関わっていた人も物色も、命終る時になれば全て断絶されて、自己の善悪の業報のみが自分の所有物になる。無量寿経には、このような自己の蔽しさを次の様に説いている。

「人、世間愛欲の中に在て、独生し、独死し、独り去り、独り来る、行に当て趣く苦楽の地に至り身自ら之を当く、代る者あることなし、善悪変化し殃福処を異にし、あらかじめ蔽に待つ、当に独り趣入すべし、遠く他所に至りぬれば能く見る者なし、善悪自然にして行を追て生ずる所なり、窃窃冥冥として別離すること久長なり、」と。

自己の存在を独生・独死・独去・独来の孤独者であると感じた時この無量寿経は私自身の為の聖典であると思える。

大橋 俊雄 著

日本人の行動と思想

法 然 — その行動と思想 —

ここに、「日本人の行動と思想」と題記されたシリーズは、評論社の斬新な企画によるもので、転換期における日本民族の宗教的先覚者の具体的な実践行動とその内奥の思想遍歴を通して、現代人への宗教的指針を標榜したユニークな叢書である。本書、『法然——その行動と思想——』はその第一巻であり、そうした企画の特異性を充分に咀嚼して、宗祖法然上人の新たな伝記的著作の作成を試みようとしたものである。法然上人の史実や消息を努めて実証的に追いつながら、その折り折りに説かれた浄土教義思想に平易な文章で評釈を施したものである。著者は大橋俊雄氏——我が「浄土」

誌の読者諸賢においては、既に一昨年の半年に渡った連載「維新のころの人たち」などの筆者として御存知の方も多々あられると思うのだが——で、もとより日本中世仏教史を専門とされる碩学の士であるわけで、殊に宗祖法然上人伝に関する論文は多く、現在は時宗文化研究所に奉職されている関係から時宗に関する研究も豊富である。

本書はもとよりそうした著者の長年の研究成果を巧みに取り入れて、法然上人の教えの深さと、その激動の生涯を余すところなく書き記されたものである。その著作の基本的立場は事実即した史学的見地であり、極めて客観的な論法で法然上人伝をよく検討し、鎌倉時代という転換期の宗教の本質を更には後に日本人の心に深く影を宿すに到った浄土教の教理的概括とその信仰の様態を、主として法然上人の伝記を念頭にその行動した時代を順次辿りながら、遺憾なく説き進めているわけである。

宗教を求める心なくして、新しい宗教の誕生はのぞめない。生まれても育ちえない。だが鎌倉新仏教は、弾圧を浴びせられながらも、すくすくと育ってきた。いわば、これら新仏教の祖師たちは、救いの対象を一般民衆にまでおし広げ、だれかれの差別なく救われると説いた。閉

ざされた門は、開かれた。

とは著者の「はしがき」における冒頭の一文であるが、ここには言うまでもなく、著者の本書への熱意溢るる意気込みが、ひしひしと感じられ、ひいてはこの著者の基本的な信念が、本書の独創性をより高める要因となっているのである。本書は言わば法然上人の思想乃至は浄土教思想に関しての新しい宣揚書であり、余り数多いとはいえない浄土宗の出版物の中ではつとに意義深い新刊書と言えよう。

さて、先にも記した如く本書の大いなる特色は、著者大橋俊雄氏の実証史学の立場にのっとりたわかりやすい簡潔な説明にあり、鎌倉新仏教の祖師として一宗を開いた法然上人の歩まれた道を如実に具現したということにあるわけである。浄土宗の理解の為にもまた宗祖法然上人の教えや人となりの全貌を知る上にも本書は正に恰好の手引書であり、たとえ初心者ならずとて、是非共一読をおすすめしたい一書である。

目次

Ⅰ法然の求道と専修念仏の発見

誕生・押領使時国と預所定明との対立・出家・登叡して・俗塵をきらって黒谷へ・「往生要集」に接して・
釈迦堂参籠・南都に浄土教をたずねて・観経疏を閲読

・専修念仏の発見・回心の時期・開宗の意志・下山して広谷へ

Ⅱ教説

聖道門と浄土門・万人救済の教え・阿弥陀仏とは・極楽浄土とは・三心・二河白道のたとえ・難行と易行・正行と助業・念仏者の心得

Ⅲ思想の形成

時機相応の教え・大原問答・九条兼実との出会い・「選択集」の内容・理智より実践の教判へ・善導観と学問観

Ⅳ教団の組織と法難

教団弾圧の前提・七箇条の制談・専修念仏のひろがり・国家権力を否定した人格教団・同信同行の衆団・興福寺衆徒、さらに九条良経に言上・ついに遵西、住蓮を処罰

Ⅴ法然の流罪と滅後教団の様相

配所での生活・赦免されて勝尾寺に・法然の死・滅後の法難・蓮房信空・多念義の隆寛・一念義を説く幸西・鎮西に弘教した聖光・その後の法流

(評論社刊・価五九〇円)

相 往



相 還

▽「浄土宗全書」復刊される

待望久しい浄土宗全書の復刊が計画されてより約一年、去る四月七日、法然上人の御生誕の日に、第一巻が見事に復刊され、発売された。浄土宗では、昭和四十九年に法然上人浄土開宗八百年を迎えるにあたり、記念事業の一つとして、浄土宗全書正・続四十二巻を復刊することになったのである。本全書は、初版発刊後六十余年を経過しており、戦火で焼失したものが多く、また校正の不備も多くあり、宗内はもとより、ひろく全仏教界から復刊の要望がなされていたものである。今回の第一巻の体裁はこの面目を一新し、とくに現在にいたる研究成果等をふまえた解説がつけられている。毎月一卷づつ復刊されることになっているが、各巻ともに二千元で、発売元は東京本郷、山喜房仏書林である。

▽浄土宗寺庭婦人会会誌「微風」刊行される。

浄土宗七ヶ寺の寺庭婦人の全国組織である。浄土宗寺庭婦人会（会長佐藤治子女史）より、今度「微風」（創刊号）という題名の機関誌が発刊された。

体裁はガリ版で、学生の文化クラブ等の機関誌のようであるが、清楚な感じである。内容はなかなか楽しい。岸門主、小林宗務総長、鵜飼執事長、金田教学・藤田総務両局長、佐藤会長など、宗門のお歴々がそろって原稿を寄せているのも、近來にないことであろうし、会員だよりも、仲々読ませるものがある。「微風」の命名者は御門主であるが、「阿弥陀経」に説かれている極楽の様相の心地よい微風が、現代社会のとげとげしい世情をやわらげる役割を果すことを期待したものである。

▽大正大学図書館完成まじか

仏教総合大学として体裁をととのえつつある大正大学では、校舎の新築に続き、図書館の新築が昨年くれより進められているが、先月十四日には第一期の工事も完了、八月末の完成を目指して第二期工事も急ピッチで進められている。完成後は本来の書籍収蔵・閲覧のほか、附属仏教研究機関も数多く設けられることになっており、今からその成果を期待してもあまるものがあるろう。

道

嵯峨

釈迦堂への道

高橋 良和

比叡山は伝教大師最澄が開いた山である。

伝教大師はこの山に一乗止観院を建て、天台法華宗の基礎をつくり、それが根本中堂として、今もなお全山の中心的な堂宇として重きをなしている。

その最澄が弘仁九年に「山家学生式（さんげがくしょうしき）」というものを書いて、嵯峨天皇のもとに提出しているが、その学生式のなかには、天台のきびしい定めを決めている。そのなかに、

止観業、庶那業を十二年間修めたのち、適材適所に国宝とし、或は国師として、或は国有の僧として、天下国家に役立たせること、更に、

国師、国有の菩薩僧は、山を出て、或は国司、または郡司らのもとに行って、天台の教養と体験を生かし、精神と思想のある指導者として活躍せしめる。といった人材養成のことを述べているのである。

ところで西塔黒谷の青竜寺に隠遁の生活に入った法然上人も、この山家学生式のおしえの通り、十二年間の籠山生活をつづけたのであった。

法然上人の「一十二年山に籠って出でず」という修行の生活というのは、黒谷青竜寺から一步も出でず、籠山比丘ということであったが、十二年はまたたくうちに過ぎてしまった。

そこで法然上人は、保元元年に山を下って南都への遊学を志すのであるが、それからというものの、奈良の興福寺・東大寺などには比叡山における浄土教とは異なった南都の浄土教の流れがあったので、それを学ぶために比叡山をあとしして奈良に向うのである。

このとき法然上人は二十四才であった。

山を下った法然上人は、すぐさま京の町に入って、奈良に赴くところを、洛西嵯峨の釈迦堂に参籠しているのである。

釈迦堂は清涼寺と称し、以前は源融（みなもととおる）の別荘であって、栖霞寺とも称したところである。

この釈迦堂への道は、おそらく当時なら、京都に入って太秦広隆寺を通る太子堂を通ったのではないかと思うが、今の広沢の池の前の道ではなかったと思う。

もう一つ三条通りをまっすぐ広隆寺にすすむ道であるかもしれないが、この道は、滅後の法難のときに、東山知恩院の御廟から遺骸をかついで弟子たちが西山光明寺に逃げた道でもある。

そのいづれでもよいが、二十四才の若きこの宗教家が、どうして嵯峨釈迦堂への参籠ということになったかという点、釈迦堂には、東大寺の喬然（ちょうねん）が中国の宋から招来した三国伝来という釈迦如来が安置されているところであったからなのである。

少なくとも、法然上人の念仏のおしえというものは、単に法然上人が発見したものでないので、これは、釈尊の発見した仏教が、日本の法然上人によって、今浄土教としての私たちをとったのについて、この三国伝来釈迦如来の前において、はっきりと意義づけをすることであったと思うし、この地においては、昔からかなりの念仏の信奉者が住居していたとみられるので、それらの人々にも結縁することによって、新しい救済のこの念仏のおしえをどのようなかたちで庶民に侵透させようかと、考えたからではなかったかと思う。

法然上人は、この釈迦堂にはわずか一週間の参籠であるが、およそ上人の伝記のなか

で、二十四才という年令のときの動きとしては、一ばん活目したいものがあるといえる。

法然上人の伝記を読んでみても、青少年時代の文献は非常に少ない。

そのなかにあつて、はっきり二十四才という年を記していることで、この釈迦堂の参籠は、若き日の法然上人の求道の姿をあらわしているのであるから、この年を頂点として法然上人の救道の姿を一つの教化の指針としたいのである。

たまたまこの釈迦堂には、二十四才の求道の法然上人像が建設されている。

全国の二十四才の青年たち、あるいはそれに関心のある人々の寄贈でできた法然上人の像である。

その発源人の長沢伝氏は、この寺の住職塚本善隆師の弟子であるが、やむにやまれぬ法然上人への思慕から、この銅像の建立を思ひたつて、漸く完成したのである。

山門を入った左側に、立像のこの求道の法然上人像が立っている。珍らしい銅像であり、全国唯一の青年の法然上人像である。

法然上人は、ここから奈良に向うのであるが、その途中洛西の広谷に立ち寄っている。

広谷というのは、後に比叡山を下つて、はじめて大衆教化に乗り出したときに、最初に布教することになる地であるが、釈迦堂あたりと同様に孟宗竹の茂るところであつて、このあたりはみどりの竹林のまんなかの道である。特に広谷に向うあたりは一入藪の茂みの深いようである。

京都から釈迦堂への道も同じように、この竹藪だったと思うのであるが、その藪のなかを足早に歩む若き聖の姿を思ひうかべると、決意を秘めた法然上人の若き日が想像されるようである。

Ⅱ 宝物シリーズⅡ

風ふかば心のくもを ふきはらひ

いつもすすしき 十五夜の月

木喰五行明満の自刻像や仏像を一度でも目にとめた人であれば、誰しも心を慙されるであろう。容貌は天真というか、どこかとぼけている。法衣は簡素であり線は大端で刻跡は無心でもある。すべてが卒直で決して形式への固執はない、木喰の無心さがそのまま自然に仏像に象徴されている。こうした木喰作の微笑仏は日本全国のいたる所で拝むことが出来る。

木喰明満は一七一八年(享保三年)に甲州の山里に貧しい百姓の第二子として生まれ、二十二歳のとき出家した。明満の半生は日本廻国の巡礼に費いやされた。世俗を捨て無心の境地に立った彼の教化は民衆の中に次第にうちとけていった。

木食のさとる心は ごくふかい

どこがどうとも わからざりけり

と歌っている。廻国は自からの修行でもあった。しかし、何もむづかしい教理を説きはしなかった。無学な者も貧しい者も仏のよき伴侶であるとしている。すべての像にみられる微

笑の相は明満自身の修行により得た、その反映であろう。

人は誰しも微笑をもつ、その微笑の中から人に与える心がどれだけ心のかて、ささえとなることであろう。その微笑みが宗教であり、深く温かく教え説かれているのである。全てのものは彼の微笑の中に引きつけられてゆく。誰とて、その前に立って微笑みに温められない者があろうか、微笑まずして、それを見ることは出来ないであろう。他の仏像にもやさらかな微笑みをかけているものも多くある。しかし、それらは厳しさの中より悟り得た高貴な微笑みであり、凡夫においては近づき難いあまりにもかけはなれた遠いものにほかならない。明満のそれは身近である。気軽に微笑みかけてくれる。まして何事にもこだわりなく自由であり、宗派には一切こだわらなかつた。彼の民衆教化は、いふなれば微笑仏を通して肌から浸み込んでくる無心の教えといえよう。

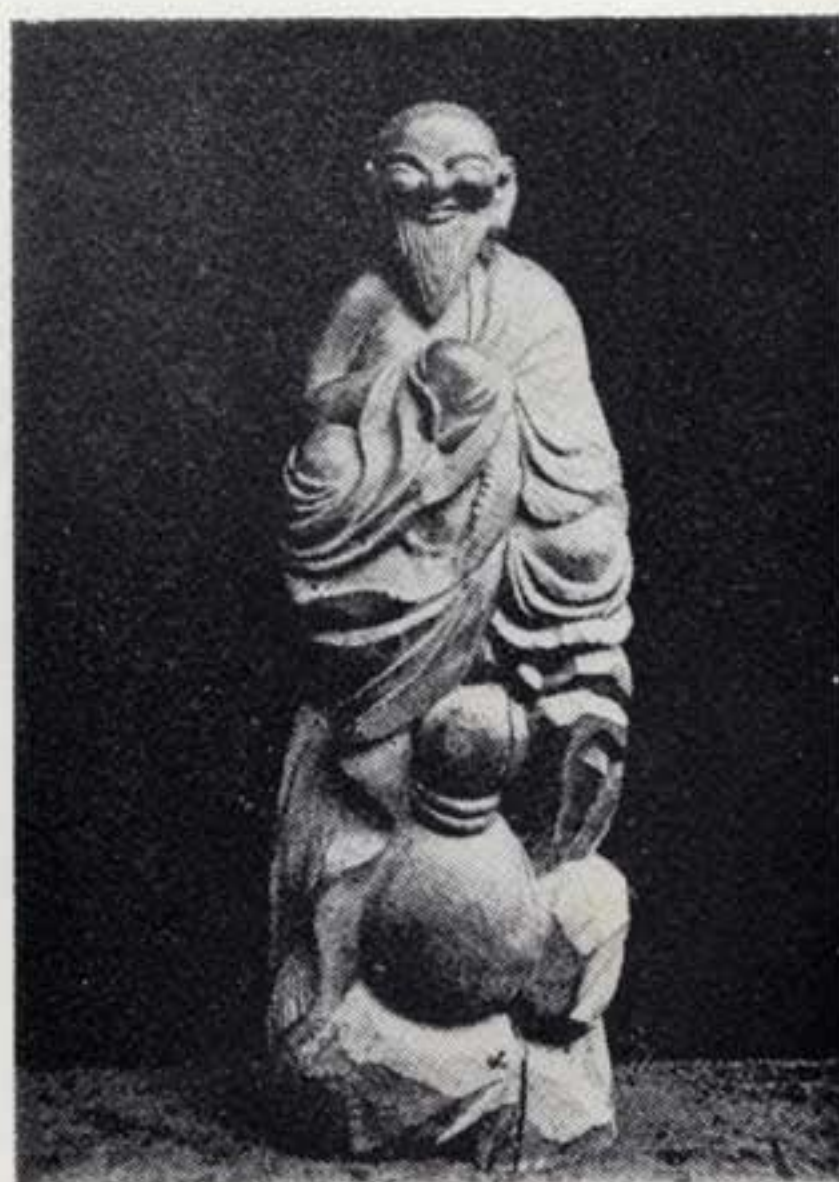
それにしても、こうした微笑仏によって多くの人々が心の安らぎを得たことであろう。彼の廻国は日本全国に渡っている。名もなき旅僧が現われ、その地に堂宇を建立し供養仏を刻む、しかも民衆はまたたくまに彼の囲りに集る。明満の魅力がそうさせるのであろう。歴史上に幾多の名僧はいるが、その独創性は他に見ることは出来ない。

(佐々木洋之)

人 上 行 五 喰 木
 仏 体 千 と



作才十一人上人喰木
 = 音世観輪如意 =



= 像刻才四十八上人 =

「浄土」購読規定	一部 定価 九十円	会費一カ年金二、〇〇〇円 (送料不要)	浄土 六月号	昭和十年五月二日 第三種郵便物認可 昭和四十五年五月二十五日印刷 昭和四十五年 六月一日発行	定価 九十円 編集人 宮林昭彦 発行人 佐藤密雄 印刷人 関 二三男 印刷所 三幸社印刷所	東京都千代田区飯田橋一ノ十一ノ六 発行人 法然上人鑽仰会 電話東京二六二局五九四四番 振替東京八二一八七番 東京都港区芝公園十九号地の一 浄土宗務支所内 編集室 法然上人鑽仰会
-----------------	------------------	---	---------------	--	--	---

日本仏教の成果 浄土教のあけぼの

覆刊のあいさつ

浄土宗開宗八百年記念慶讃準備局長 小林 大 巖
浄土宗宗務総長

「浄土宗全書」正統兩篇全巻の覆刻頒行発願以来二十余年、三四師反の契働を忝うするも、該の資金面に困苦を覚ゆ。関連の近親宗派や、其他に援助を要めようにも、容易にその意をえず、仏祖の慰護と有縁の扶翼を念じつつ、浄土宗開宗八百年を目睫に迎え、焦心しきり願意の暢遂をして止まず。折から昨晚秋、有限会社山喜書房仏書林代表取締役青木正雄氏から、師友を介して、該全書全巻の覆刻刊行に必須の財的法的などの一切責任荷負をはじめ、関連諸般の悉皆責務を社をあげて負担に当り、浄土宗や一般人士や社会に対しては、商賈營利を度外視して仏教精神の伝弘に立脚し、念仏信行の策勉奉仕に、赤誠一貫の確約で、覆刻発行に挺身従事の切望申請と、同願師友の激励に依恃し、浄土宗開宗八百年記念慶讃準備局の出版事業の一として、内外大方の覆刻刊行要請に応えるべく、初巻配本を、法然上人聖誕日の四月七日と定めて宿志の具現に、山喜房仏書林の切願を聴諾したのである。この覆刻刊行に際し、師反を煩して、底本の由来や校正の頗末解説や爾来の研考様子の等々を、その責任分担で附すを念いしも先ず覆行をと急ぎて、夫等は他日を期した事情を諒察された。

いささか覆刻刊行の来由を略述して、念仏教学の師範人生行路の指標、教化振作の洪軌と仰ぎつつ、先聖の慈悲に報告して、信解行証の策勉を希念にしてたえない。

浄土宗全書

正統
四十二卷

- ・ 予約申込規定 全四十二巻予約申込のみに限り出版します。
- ・ 定価各巻 2.000円 / 特価全巻一時払80.000円 / 申込期限昭和45年5月末日
- ・ 刊行期日 昭和45年4月7日第一回第一巻発行 / 御申込みは大正大学浄土学研究室・仏教大学浄土学研究室・下記発売又はお近くの書店か浄土宗宗務支所にお申込み下さい。 / 内容見本進呈

発行所 浄土宗開宗八百年記念慶讃準備局

発売所 山喜房仏書林

東京都文京区本郷5-28-4 東大西門前
TEL03-118-5361 振替東京1900